

14:53 人々がイエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長たち、長老たち、律法学者たちがみな集まって来た。

14:54 ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中にまで入って行った。そして、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。

14:55 さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするため、彼に不利な証言を得ようとしたが、何も見つからなかった。

14:56 多くの者たちがイエスに不利な偽証をしたが、それらの証言が一致しなかったのである。

14:57 すると、何人かが立ち上がり、こう言って、イエスに不利な偽証をした。

14:58 「『わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる』とこの人が言うのを、私たちは聞きました。」

14:59 しかし、この点でも、証言は一致しなかった。

14:60 そこで、大祭司が立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているが、どういうことか。」

14:61 しかし、イエスは黙ったまま、何もお答えにならなかった。大祭司は再びイエスに尋ねた。「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。」

14:62 そこでイエスは言われた。「わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」

14:63 すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「なぜこれ以上、証人が必要か。」

14:64 あなたがたは、神を冒[?]することばを聞いたのだ。どう考えるか。」すると彼らは全員で、イエスは死に値すると決めた。

14:65 そして、ある者たちはイエスに唾をかけ、顔に目隠しをして拳で殴り、「当ててみる」と言い始めた。また、下役たちはイエスを平手で打った。

多くが逃げ去った後も、ペテロは「イエスのあとをつけながら、大祭司の庭の中まで」入って行きました。イエス様への思いがあり、心配だったのでしょう。この後彼はイエス様のことを「知らない」と見捨てたのですが、しかし彼が「大祭司の庭の中」という危険なところまでついて行ったということは、神様に知られていたはずですよ。

イエス様はその思いをも知って、彼に「立ち直ったら…」と、希望と励ましをくださったのでしょ。私たちは弱いものですが、それで開き直ったり諦めたりしないで、中途半端と見られたとしても、自分にできる最善をつくしましょう。主は必ず見ておられます。

イエス様は罪のないお方ですから、誰も裁くことなどできません。その罪状が「ほむべき方の子、キリスト」であるとの証言であるというのは、示唆を与えます。人間は神を裁くことも評価することもできないのですが、そのような傲慢なことをする場合は必ず、神の神聖を否定するのです。すなわち、創造や主権、救いやさばきについて、それを否定して、自分が非難されないようにするのは、神を認めないことによって自分の安泰を保とうとするのです、しかしそれは逆に自分を窮地に追いやることとなります。

神の主権を信じて、その十字架で救われた私たちですから、今もまた主の主権の前にひれ伏しつつ、自分の存在を安心なものとしてゆきましょう。イエス様は「ほむべき方の子」であります。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

